

インタビュー

藤井 紀子

この前の給食の時間だった。安藤君が、「田中さんのことどうおもいますか？」とふざけて手をマイク代わりに、女子や男子に聞いてインタビューをしてまわって歩いてた。

田中さんは、四月に富山から転校してきた。私や私の友だちの上田さんと同じ寮に引っ越してきた。同じ時に名古屋から青山さんも引っ越してきたけれど、その子はすぐ学校になじんで友だちもたくさんできた。

私たち四人は初め、いっしょに登校していたが、だんだん田中さんだけはずれていった。田中さんは、やせていて、あだ名は『モンキー』とか『ガリ』とかだった。顔が猿に似ているとかでそうなった。私は青山さんと田中さんと同じクラスだった。田中さんは、教科書を読んだりする時、

つい方言になってしまったので、さんざん笑われたり、ひやかされたりしていた。それに、私のクラスは特に男子と女子の仲がすごく悪かったので、田中さんが男子と話したりしている、変なふうにみんなは見たり言ったりしていた。特に女子の中では『ぶりっ子』とかよく言われていた。私もいつの間にかそれに交じていた。そして、田中さんの味方などする子は一人もいなくなった。

そうじの時間、田中さんがいなくなると、田中さんのふでばこを机の中から出し、けりあったり、ランドセルやカバンを投げあったり踏んだりしていた。お母さんはそのことを田中さんのお母さんから聞いたみたいで、

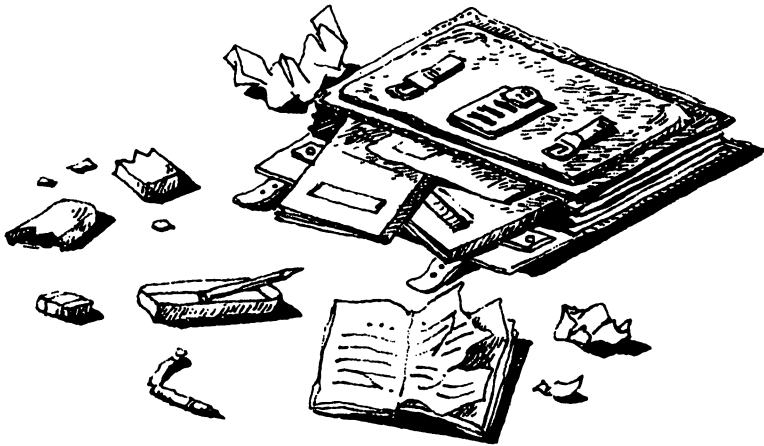
「田中さん、家に帰ってから、一人で泣いてるんだって。仲よくしなくちゃだめよ。」

と私に、何回も言った。私も悪いことしすぎたかな、と思

つてやめようと思ったけど、田中さんを見るとなかなかそ
んな気になれなかった。でも、このごろ田中さんへのいじ
めはひどすぎる、と何度も思っていた。

この日は田中さんはかぜで休んでいた。

「藤井、おまえ田中さんのことどう思う？」
安藤君が私のところへもまわってきた。



インタビュー（中学校向け）

A 教材設定の意図

学級の中にいじめがある時、いじめの当事者でないまわりの生徒はいろいろな思いでその中にいるだろう。「いじめられて当然」「ちよつとひど過ぎるかなあ」「かばうと今度は自分がいじめがふりかかってくるのではないか」、そんな思いの中でそれぞれが揺れているだろう。

いじめられる子にはいじめられるだけの原因があるということとを言う人もいる。しかし、けんか両成敗的にいじめる側を注意し、いじめられる側にもきちんとしなさいというような注意をすることで、解決を図ろうとしても、事態は一向に改善されない。なぜなら両者の距離がひとつも縮まっていけないからである。教師の基本的立場として、どんな理由があれ、いじめは絶対に許されないという立場を堅持しつつ、生徒の心の揺れを受け止め、互いの思いをつなげていきたい。

それぞれが他者の思いを共有できない状態にある時、重苦しい雰囲気教室に漂う。特にいじめられている生徒をかばうような言動はなかなかしにくい。教室に流れる空気に気を使いながら、使う言葉を選んでしまうような状況が続くこともある。それぞれが自分は自分と思ひ、己の身を固くしてしまう。こんな時、生徒の心はばらばらに切り離されていて、つながりはない。

そんな中にも、こんな状態で過ごすことに悶々として、なん

とかならないかと思っている生徒もいるはずである。しかし、どうしていいかわからないうちに、時間がどんどん過ぎていく。そんな揺れる思いを持つ生徒たちを受け止め、励まし、互いの思いをつなげるきっかけとしてこの教材を取り扱いたい。

お互いの思いを深く受け止められる学級づくりは、人権教育のひとつの課題である。いじめだけでなく、友だちの問題を学級の課題として受け止められる集団をつくっていきたい。

B 教材の解説

本教材はある中学校の人権作文をもとにしている。原文では、この後、いじめられている生徒を思わずかばうようなことを言ってしまう。自分でもどうしてそんなことを言ったのかと、心は揺れる。しかし、休んでいた田中さんの家へ行ったあと、彼女は元気をとりもどしていく姿を見て、筆者は勇気を出してよかったですと思う。そして、家でも学校でも、誰か一人でもつらい思いをしていたら、みんながつまらない。自分の心に素直になつて助け合っていけばいいと結んでいる。

筆者自身は、時にはいじめる側に交じっていたと書いている。そうしながらも、母親に言われて悪いことをし過ぎたかなと、反省している。でも、田中さんを見ると、なかなかそんな気になれないとも言っている。やはりいじめられる子は、いじめられるだけの原因があるというのである。

しかし、筆者も心が揺れながら「でも、このごろの田中さんへのいじめはひどすぎる」と何度も思っているところに、安藤君がインタビュールにきた。

教材文をここで切ったのは、ここまでの心の揺れを共有してほしいからである。筆者の抱いている思いは、決して特別な生徒の思いではない。ごく普通の生徒の思いである。時にはいじめに荷担しつつも、それはいけないことという矛盾の中に、多くの生徒がいるのである。そうした矛盾を弱さも含めて出し合ひ、受け止め合いながら、自分自身のありよう、学級のありようを問い直していきたい。

C 指導上の留意点

話し合いの中で、生徒はまさに自分自身のクラスの問題を念頭に置いて話しているはずである。従って、そうした思いを拾い上げ継続してクラスの課題としていきたい。

D 参考

・人権作文報告集「ひとの心に触れて 共に生きる」
(砂上昌一編集 一九八七年加賀市立錦城中学校一年)

本教材を使った授業から

◆「安藤君の『田中さんのことをどう思う?』という質問に対して、藤井さんはどう返事をしたか。」と聞く

Aタイプ・・・「田中さんがかわいそう」「もうやめ

よう、田中さんの気持ちも考えよう」

Bタイプ・・・「返事しないで無視する。」「関わり

たくない」

Cタイプ・・・「いじめはひどすぎる。でも、やめる

気にはなれない。」

の三つのタイプの意見が出た。自分はどういうタイプだと思いか挙手させたところ、Bタイプが多かった。さらに話し合う中で、自分自身の弱さやありようを問う必要がある。

(石川)

◆いじめは悪いことだというのは生徒はよく理解している。この授業では、いじめる人の心の中にもいけないのかなあと言う気持ちの揺れがあることと、自分の目の前で実際いじめが行われているときに、やめると言えるかということに視点をあてた。後者の点では、やはり周りを気にし、反対にいじめられるのではないかと考え、言えないと言う意見が多く出た。(鳳至輪島)

◆クラスの中で気になっていることを挙げる部分が生徒の身近なテーマになってよかった。今後のクラス経営をする上での大きな資料となり、生徒にとってもクラスのことを考えるよい機会となった。(石川)

◆似たようなことが生徒の周りでも起こっており、生徒は自分たちの問題として資料が読めたようである。(石川)

E 授業の展開例

教師の基本発問・助言	生徒の活動・指導の要領
<p>一 導入</p> <p>① 気になっていることが話し合えるようなクラスにするにはどうしたらいいか考えましょう。</p> <p>二 展開</p> <p>② 教材文を読む。</p> <p>③ 藤井さんは、田中さんがいじめられていることをどう思っていたのでしょうか。</p> <p>④ 藤井さんは悪いことをし過ぎたかなあと思いつつどうしてやめられなかったのでしょうか。</p> <p>⑤ この後あなたなら安藤君に対してどう答えますか。またそう答えるのはどうしてですか。</p> <p>三 まとめ</p> <p>⑥ あなたのマわりで気になっている問題はありますか。</p>	<p>① 自分たちのことを考えるきっかけであることを暗示させながら、教材プリントを配る。</p> <p>② 同じ中学生の文章であることに注目させる。</p> <p>③ 「自分でも悪いことをしすぎたかなあと思いつついじめていた」という気持ちの揺れを板書しながら、おさえる。</p> <p>④ かばうと自分自身がいじめられるので、いじめる側にいたという気持ちをおさえる。</p> <p>⑤ 次のような答えが予想される。生徒はクラスに問題があれば、それを念頭において話しているはずだから、お互いの思いを確かめ合いつつ、話し合う中で、自分の矛盾や弱さに気づかせたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ そんなことを聞くのはもうやめよう。田中さんのつらい気持ちを考えよう。 ・ 関わるのはいや。返事しないで無視する。 ・ 自分がいじめの対象になるのはいやだから、悪いと思いつつ、田中さんの悪口をいう。 <p>⑥ 今後クラスで取り上げ、話し合っていく。そのために、必要であれば書かせてもよい。</p>